

医事万華鏡

2020年初頭から猛威を振るう新型コロナウイルス感染症によって、否応なしに人々は変化の矢面に立たされ、目に見えない疫病への不安を募らせています。ただ、人類はこれまでの歴史の中で、ペストや天然痘、結核やスペイン風邪などの感染症に見舞われてきました。しかし、とりわけ社会や思考体系に大きな影響を与えた感染症として、多くの作家らによって語り継がれてきた感染症と言えば、ペストでしょう。

ペストは発症すると体に黒い斑点ができて死に至ることから「黒死病」とも呼ばれ、既に古代ローマ時代にも流行し、首都コンスタンチノープル（現在のイスタンブール）で、毎日5000人〜1万人もの死者が出たと推定されています。また、14世紀にはヨーロッパで蔓延し、当時約1億人もいたヨーロッパの人口の内、2000万〜3000万人がペストで命を落としたとも推定されています。まさにペストは人口大激減の要因であり、社会を大変革させた感染症であるとも言えるでしょう。

ところで、14世紀の詩人ボッカチオは『デカメロン』（1353）の中で、フィレンツェを襲ったペストの流行に

ついて言及し、一日1000人以上の人がペストに罹り、看病する人もなく、手当もされなまま虚しく死んでいく様子を描いています。

一方で、ボッカチオ自身は田園の完全に隔離された家屋の中で、遠く離れた都市の秩序の崩壊について俯瞰し、疫病の不安に苛まれながらも、束の間の享楽にいそしむ人々についても描写していました。もともと当時、ペストは病気が人間の内側にある怯えや恐怖心、憂鬱と結びついた状態であると考えられていたため、人々が陽気にふるまうことはむしろペストの予防法として推奨されていたようです。

そんなペストに晒された時代を、歴史学者のJ・ホイジンガは名著『中世の秋』（1919）の中で、14世紀は生のあらゆる局面に、「死を想え」（memento mori）の叫びが響き渡っていたと分析しています。「死を想え」とは、人生は無常であり、死は誰にも平等に訪れることを忘れてはいけないとの教訓です。

さて、新型コロナウイルス感染症という目に見えない疫病を前に、依然としてわれわれは手探りで対策を講じている状態です。ただ、徒に怯えていては何も良いことはありません。14世紀という遙か昔、同じような感染症に見舞われていた人々が培った「メメント・モリ」の教訓から、われわれも改めて、死を通して生を思うことが求められているのではないのでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

